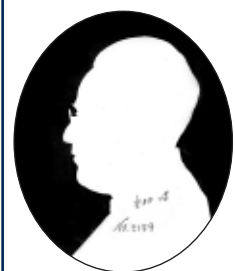


吉村昭記念文学館 ニュース 万年筆の旅



vol.9

平成29年10月31日発行
登録番号(29)0046号
編集・発行／荒川区
問合せ／
荒川区地域文化スポーツ部
ゆいの森課文学館係
〒116-0002
東京都荒川区荒川2-50-1
TEL.03-3802-4976

題字／津村節子氏
切絵／山崎達郎氏

【開館時間】
9時30分～20時30分
※企画展は17時まで
【休館日】
毎月第三木曜日・年末年始
・特別整理期間 他
【入館料】
無料

「ゆいの森あらかわ」が オープンしました

平成29年3月26日、吉村昭記念文学館を併設した「ゆいの森あらかわ」が開館しました。当日はあいにくの雨模様でしたが、開館セレモニーが始まる頃、1階エントランスホールには多くの来館者が集まっていました。

セレモニーでは、「ゆいの森あらかわ」の名譽館長にご就任いただきました津村節子先生がご挨拶の中で、「私は、ここに来ればまた吉村に会えると思って、足しげく通いたい」と文学館について感慨深くお話しされました。開館当日の様子は、新聞やテレビでも取り上げられるなど、大きな反響がありました。



開館セレモニーでの
テープカットの様子

来館者30万人突破

荒川区の学びと子育ての新たなランドマークである「ゆいの森あらかわ」は開館以降、文学館への来館者をはじめ、読書や学習での利用者、遊びラウンジや学びラウンジの子どもたちなど、赤ちゃんから高齢者の方まで毎日多くの皆さまにお越しいただいています。

開館から1か月半の5月12日には来館者が10万人となり、開館から約5か月となる8月21日には、30万人目の来館者をお迎えすることができました。

今後、「ゆいの森あらかわ」がさらに魅力あふれる施設となり、これまでに以上に多くの皆さまにご利用いただける施設となるように取り組んでまいります。



30万人目の来館者と西川太一郎区長

ゆいの森あらかわ施設の紹介

1階から2階



1階 絵本に囲まれたゆいの森ホール

1階には小さな子ども向けの「遊びラウンジ」や「えほん館」を設け、親子で様々な遊具や絵本を楽しむことができます。また、絵本に囲まれた「ゆいの森ホール」では、吉村昭氏に関する講演会や子ども向けの図書イベント、映画上映会等様々な世代の方が参加できる催しを行なっています。2階には、小学生から中高生までの居場所となるよう、学びラウンジやティーンズコーナーを設け、様々な体験や交流を通じて学びの場として利用していただいています。また、2階から3階にわたり、吉村昭記念文学館も併設しています。

3階から5階

3階・4階は、一般書コーナーのほか、俳句資料や芸術コーナー、専門書コーナー等を設け、読書や学習の場として利用していただけます。5階には、施設内で最も静かな学習席を設置し、晴れた日には屋外で読書を楽しむことができます。「ゆいの森ガーデン」です。



5階 ゆいの森ガーデンてらす

このように、ゆいの森あらかわは、従来の図書館が持つ、個人の知識吸収や学習の場としての側面だけではなく、親子や友達同士、グループでの多様な活動や交流をする場としても利用していただいています。

常設展示室の紹介

常設展示は、2階から3階にわたる9つのゾーンで構成されています。

「死とはなにか」「生とはなにか」を主題に、人間の本质を探究した吉村昭の生涯と作品世界を、自筆資料や愛用品をはじめとする、さまざまな資料とともに紹介しています。

ここでは常設展示の一部について紹介します。

文学館入口の展示

吉村昭記念文学館のエントランスでは、出版社から刊行された著作本のうち、選集類を除く、初刊本131作品をグラフィックにより原寸大で展示しています。なお館名は、作家の津村節子氏に揮毫していただきました。

文学館の入口付近には、自筆ノートをデザインし、「文学はつきつめた戦ひです」という言葉を入れた懸垂幕を展示しています。この言葉は、昭和28年(1953)に、津村氏に宛てた書簡に記されました。丹念に収集した証言や資料調査を緻密に書き留めたノートの筆跡とともに、吉村の文学に対する姿勢を感じていただくことができます。

2階常設展示室

2階展示室には、吉村が昭和53年(1978)から平成18年(2006)

に亡くなるまで、使用していた書斎を再現しています。書斎の書棚にある書籍や資料は、一部複製を除き、生前に使用していたものを展示しています。机の前の椅子には自由に座っていたことができる、創作の場を体感し、作家の思いを感じることができます。

また、書斎再現展示に隣接して、著作閲覧コーナーと、映像コーナーがあります。著作閲覧コーナーでは、書斎再現展示を鑑賞しながら、著作に親しむことができます。映像コーナーでは、吉村とゆかりの深い方々による証言をはじめとする10本の映像から、自由に選択し視聴することができます。吉村の人物に親しみ、作品世界について理解を深めることができます。



奥に書斎の再現が見える
2階常設展示室の風景

他にも、吉村作品の主な舞台や取材地を地図で示した「吉村作品の舞台」では、北海道から沖縄まで、徹底して事実を求めて自ら訪ね歩いた吉村の信条と、作品世界の広がりを知ることができます。

特集コーナーでは、「自然災害と人間の営み」「三陸海岸大津波」と「関東大震災」をテーマに、証言を書き留めた自筆ノートや防災について語った講演資料などを展示しています。



3階 自筆原稿紹介コーナー

3階常設展示室

3階展示室の一角には、作品紹介とともに、自筆原稿を展示する「自筆原稿紹介コーナー」を設けています。

10月20日から12月20日までは、自筆原稿「めっちゃ医者伝」の冒頭を展示しています。この作品は、昭和46年(1971)に刊行された後、文庫化の際に「雪の花」と改題、加筆されました。越前福井藩の町医、笠原良策が、私財

を投げ打ち、異国から伝来した天然痘の予防となる種痘を広めるために闘った生涯を描いています。自筆原稿からは、一文字、一文字を刻みこむ作家の息吹を感じることができます。この機会にぜひご覧ください。

なお、このコーナーは、2か月に1回展示替えを行う予定です。

著作・関連図書コーナー

3階文学館と隣接する図書館側の書架には、著作と関連図書約1300冊を排架しています。関連図書としては、執筆の参考文献や、吉村と関わりのある作家の著作を紹介しています。

文学館の入口と隣接することで、展示を「見る」と本を「読むこと」、「考えること」を同時に行うことができます。



3階 吉村昭著作・関連図書コーナー

開館記念イベント開催報告

山崎一穎氏講演会

「事実のおもしろさ、
嘘のおもしろさ」

北海道・樺戸監獄を
めぐるドラマー

日時：平成29年4月22日(土)

14時～16時

場所：ゆいの森あらかわ

ゆいの森ホール

挨拶：西川太一郎（荒川区長）



講演を行う山崎氏

筑摩書房）と山田風太郎『地の果ての獄（昭和52年10月文藝春秋）との対比から、小説の虚実の面白さについて、お話しいただきました。

樺戸監獄をめぐる略年譜と、北海道の路線地図を用いて、囚人たちが開拓作業に従事した地域を詳細に解説した上で、吉村と山田の異なる魅力に熱弁をふるわれました。

吉村は、現地で関係者に会い、文献資料を調査し、事実に基づいて『生』に執着する囚人と看守の物語を書き、一方の山田は、事実に主観や仮定を加えて書くことで「小説の嘘」による面白さを生み出しているとお話しになりました。

また、昭和52年（1977）という両作の発表時期に着目され、日本列島改造景気から、公害問題が表面化する時代の中で、明治のある一面の暗さである樺戸監獄をめぐる事実に、吉村の焦点が合ったことを指摘されました。

そして、「赤い人」は、樺戸監獄史でもあり、明治の歴史を浮き彫りにしているとして、吉村昭を読むということ



(左)『赤い人』昭和52年 筑摩書房
(右)『赤い人』昭和59年 講談社文庫



は、現代と過去の関係の中で、もう一度、自分の生き方を見直すことに通じるのではないかとの見解を示されました。

最後に、歴史を知ること、文学作品を読むときに、どのように、嘘と本当の切り分けが出来ているかを思い出すことを大切にしたいとお話しになりました。

森鷗外、司馬遼太郎、長谷川伸、綱淵謙錠などの作品についても言及され、参加者は、その力強いお話に聞き入り、小説の虚実の面白さと、「赤い人」が伝える事実の重みを改めて感じる時間となりました。

「文化を楽しむ」

銭谷眞美氏講演会

日時：平成29年5月13日(土)

14時～16時

場所：ゆいの森あらかわ

ゆいの森ホール

挨拶：西川太一郎（荒川区長）

吉村昭記念文学館の展示等検討委員会委員で、東京国立博物館長の銭谷眞美氏をお招きし、日本の文化の特色を考える視点と、博物館の成り立ちや、楽しみ方について、お話しいただきました。

はじめに、文化の結節点としての役

割をもつ博物館を通して、日本の文化の特色を考え、考古遺物や伝世品にみられる継続性や、日本独自の発展と外来のものを調和させてきた重層性について、お話しになりました。

また、『万葉集』や『古今和歌集』を例に挙げ、年齢、職業、性別、身分に捉われない文化の担い手の多様性を指摘されました。

そして、伊勢神宮の遷宮や、出雲大社の大修理を紹介し、日本の文化の特色は、和の心を尊び、老若男女が楽しむことができる自然と調和した循環型の文化にあると、お話しになりました。スクリーンには、国宝や重要文化財、東京国立博物館の展覧会の様子、所蔵資料などの画像を投影し、解説いただきました。

参加者は、銭谷氏のユーモアを交えたお話に引き込まれ、博物館の活動について理解を深めるとともに、日本の文化の魅力を味わいました。



講演を行う銭谷氏

展示報告

◆吉村昭記念文学館 開館記念企画展

映像化された 吉村作品の世界

会期：平成29年3月26日(日)～

5月17日(水)「前期」

平成29年5月19日(金)～

7月23日(日)「後期」

本展は、吉村昭と映画との関わりに触れながら、映像化された作品に焦点を当て、自筆原稿や台本、ポスターなどを中心に56点の資料を展示し、作品から広がる世界を紹介しました。

現在の荒川区東日暮里で生まれた吉村は、少年時代、映画館が身近にあったことから、映画に惹きつけられました。書齋に置かれていた吉村が好んだ役者や映画作品が掲載されていた雑誌を展示し、映画への思いを感じていただきました。

また、「海も暮れきる」の自筆原稿やドラマ台本、吉村が、放映後に撮影場所を訪ねて記した随筆の掲載誌を展示し、作品の映像化に対する原作者としての視点を紹介しました。

さらに、平成18年(2006)に吉村が生涯を終えてから製作された映像作品については、企画書や台本などを展

示し、吉村作品に刺激を受けた映像製作者の熱い思いを感じていただきました。

会期中の4月12日には、テレビ東京開局記念のドラマ「破獄」が放送されることを受け、台本や場面写真、ポスターの特別展示を行いました。

このほか、初めて映像化された「密会」(昭和34年公開)と、没後、最新の映画化作品である「桜田門外ノ変」(平成22年公開)の上映会を毎日交互に行い、千人を超えるお客様に足を運んでいただくことができました。

10月28日からは、吉村昭生誕90周年記念企画展「吉村昭とふるさとあらかわー生い立ちとその作品世界」を開催しています。皆さまのご来館をお待ちしています。



ゆいの森あらかわ 3階企画展示室入口

友の会について

友の会会員数等の報告

吉村昭記念文学館友の会は、平成27年3月に設立し、全国の皆さまに入会していただいております。

27年度から28年度までの会員数(年会費無料)は、個人会員588名、法人会員6団体、賛助会員143名(法人も含む)でした。多くの方からの入会及び寄附をいただきましたこと、改めて御礼申し上げます。

また、29年度からは年会費制となり、29年9月30日時点で、個人会員278名、法人会員1団体、賛助会員84名(法人も含む)の入会がありました。継続して入会していただいた方だけでなく、館のオープンとともに新たに「ご入会の方も多くいました。

なお、賛助会員の方で、氏名の公表にご承諾をいただいた方については、吉村昭記念文学館のホームページ上でお名前の掲載をさせていただいております。

高額寄附者の芳名掲載

文学館2階著作閲覧コーナーの書棚の一角では、友の会の趣旨に賛同し、10万円以上のご寄附をいただいた方のお名前(法人は会社名)を紹介させていただいております(掲載辞退の方は除く)。これまでに、計16名の方からご寄附をいただきました。

WEB版文化庁広報誌「ぶんかる」に記事が掲載されました

この度、WEB版文化庁広報誌「ぶんかる」の連載記事「博物館ななめ歩き」において、吉村昭記念文学館の記事が掲載されました。記事は、漫画家の久世番子先生が当文学館を訪問され、描いたものです。吉村昭記念文学館について、マンガを通して楽しく知ることが出来ます。

記事を掲載したチラシを文学館内でも配布しています。ぜひご覧ください。

【博物館ななめ歩き】URL
http://www.bunka.go.jp/prmagazine/rensai/naname/naname_035.html



2階 著作閲覧コーナーの書棚の一角に芳名を紹介

開館に伴い、第9号より「文学館ニュース」にリニューアルしました。